

墓石から歴史がわかる

—— 墓石は身近な文化財 ——

・・・多摩・麻生区および横浜北部の近世初期墓塔の調査から見えてくること・・・

2009/9/17 柿生中学校文化講座 中西 望介

はじめに

(15分)

なぜ墓石(墓塔)なのか?

墓塔・・・庶民の生活と信仰の資料・・・地域に生きてきた証

個々の家の歴史は書かれない。公には残らない・・・家伝文書(希少)

近世文書の大部分は・・・為政者や村の公な記録

語り伝える(家の伝承、限界・・・核家族化の中で急速に伝承が失われている)

位牌・過去帳として残る・・・宗教資料 活用に限界(+公開されていない)

墓石(墓塔)・・・ 第1義的には**宗教資料**

A、信仰・・・仏教の宗派・・・信仰の中心(こころの拠り所)

寺院の檀家 師檀関係・・・ア、「宗門人別帳」で把握される側面

イ、庶民の成長の証という側面

戒名は

広瀬良弘氏の研究

願文は 「為00頓証菩提也」「孝子敬白」・・・追善供養

「段階的な修行を経ずに、直ちに菩提(悟り)を得ること」

逆修・回忌供養

B、生活・・・1、名字 碑面の文字 個人から家へ

「慈父・悲母」家の祖先(このひとから家が始まった)

2、大きさ

身分・家格

※言葉に注意

江戸後期になると規制が強化される傾向にある。=文献あり

3尺塔婆が基本

3、石材 安山岩(青小松・赤小松、根府川石)、七沢石、花崗岩等

4、彫刻、成形・・・石工(江戸石工か 在地の石工か)

在地の石工(多摩川鶴見川流域の石工の商圏)

5、墓地の場所

①寺院(寺墓)、共同墓地、一族墓地(一家の墓地)、家墓

②家墓の場所→屋敷地の裏手、田畠、

③墓地の施設(六地藏、閻魔堂、樹木→広福寺、など)

関西地方では六地藏、棺台、惣供養塔

聞き取りからわかること

④墓地・・・先祖の眠る場所という観念

何時墓参りをするか 正月 命日 盆 彼岸 暮れ

*家産としての墓地の成立・・・家の成立・・・小農自立

・・・工組 地籍類 墓掘り帳、念仏講、

日本人が祖先・死者・家の祭祀とどの様にかかわってきたか No.1
死生観・他界観(極楽浄土)

少数であるが墓石を研究する人がいる。・・・代表的な文献から (10分)

①坪井良平 「山城木津惣墓標の研究」『歴史考古学の研究』 ※1

②河野真知郎 「中野木の墓石調査から」『中野木の民俗』船橋市教育委員会 ※2

③竹田聰洲 「近世における墓の形成」『葬送墓制研究集成』第5巻

④五来重 「葬送墓制と仏教」『講座日本の民俗宗教』第2巻

⑤坂詰秀一 「墓制の変遷史」『仏教民俗学大系』第4巻

⑥藤原典彦 「墓塔・墓標」『日本歴史考古学を学ぶ』 ※3 教

⑦谷川章雄『墓と埋葬の江戸時代』

⑧時津裕子「近世墓標研究の射程」 2002年

⑨東京都公文書館『江戸の葬送墓制』

⑩齋藤彦司 「神奈川県下における近世石造物の調査の現況」 ※4 教

⑪大田区 「大田区の墓石」『大田区史誌』 ※5 権

⑫白井太一郎 『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』歴史民俗博物館

⑬白井太一郎 『大和の郷墓の考古学的研究』歴史民俗博物館 2004年

⑭朽木 量 『墓標の民族学・考古学』 2004年

⑮縣 敏夫 「近世墓塔の発生にみる形態」『日本の石仏』115 2005年 ※6

この他に多くの自治体史が近世墓の調査を行っている。(個人や団体)

例えば 磯部淳一 「高崎市における近世墓石の編年」『高崎市史研究』

『「小川町の墓石調査報告書」』 ※7 参加

※印は特に影響を受けた研究 この他実地調査で多くの研究者に教えられた。

渡辺美彦、磯野治司、三宅宗義、齋藤彦司、伊藤宏之、青木忠雄、縣 敏夫

中西 望介 『川崎市文化財調査集録』三十一集「川崎市内における近世初期墓塔について」1996年 川崎市教育委員会

研究課題 成果・・・ 一部の好事家の段階から脱却しつつある

課題・・・ 形態分類の用語が確定していない。

必要最小限度の記載内容の統一 写真・拓本・

さらに モノに歴史を語らせるには

ア、方法が大切・・・実証できる 統計処理

イ、調査結果・・・①家の成立 ②墓石の脱仏教化・・・これでよいのか

以前は 何処に墓がある。年号は00。在ると言うだけの記述

これからは 墓石から地域の歴史を語ることが、可能になりつつある

墓塔の(資料化) そのための方法を鍛える段階

地域の歴史を調べる素材として板碑と近世墓塔を比べてみると、

中世石塔類(板碑)はこれを祀る家との関係を結びつけられない。これに対して近

世墓石(墓塔)は家との関係を直接関係付けられる利点がある。

加えて、文献や伝承との照合や聞き取り調査などによって、1つ1つの墓塔に刻まれた情報の意味を深く吟味できるという利点がある。

地域ごと、形態ごとの基準作り（形態と文献の共同作業）の段階

縣 敏夫、齋藤彦司の仕事をもとに継承するか

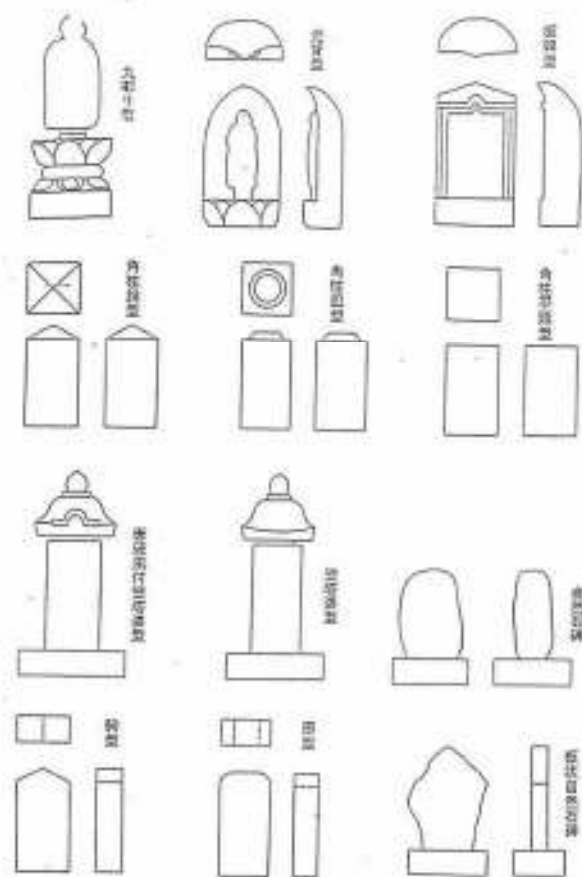
1. 墓の形（形態）には流行がある (20分)

《形態の名称》

- A, 五輪塔・・・・・・・・中世の石塔類の基本（称名寺 北条実時塔など）、近世に入ると大名家・旗本、高位の僧侶など極限られた家しか造ることを許されなかったと思われる。戒翁寺 旗本富永家、王禅寺住職塔
近世に入ると地輪部が長方形になる傾向にある。17世紀に多い
五輪塔は通常、空風輪、火輪、水輪、地輪の4から5個の部材から造られているが、1個の石で造られたモノをいう
戒翁寺 旗本富永家は巨大な一石五輪塔である。上麻生の小島家 王禅寺の吉垣家にある。小田原北条氏の家臣であったという伝承を有する家である。
- B, 宝篋印塔・・・・・・・・五輪塔とともに中世の石塔類の代表（鎌倉市覚園寺 覚賢塔など）
近世に入ると大名家・旗本、などの限られた家で造立されている。村落では旧家といわれる家に見かけることがある。17世紀に多い。近世に入ると基礎部が長方形になり、ここに銘文を刻む。
- C, 板碑型・・・・・・・・板碑から変化したと考えられ、頭部は山形に造り、額部を張りだたせている。枠線の内側をほりくぼめて銘文を刻む。正面から礼拝する形式である。17世紀に多い
- D, 駒型・・・・・・・・
- E, 光背型・・・・・・・・観音菩薩・阿弥陀如来・地藏菩薩などを半肉彫り陽刻する。背面が舟形光背のような形態になる。17世紀に多い
- F, 丸彫り型・・・・・・・・観音菩薩・阿弥陀如来・地藏菩薩などを丸ごと彫りだしている。
- G, 櫛型・・・・・・・・頭部の角が丸く成形されて正面から見ると櫛形にみえることから名付けられた。五輪塔・宝篋印塔・板碑型・光背型・丸彫り型が正面から礼拝する1観面であるが、櫛型や角柱型、笠塔婆かたは側面や背面にも文字を刻む。
- H, 角柱平頭型・・・・・・・・角柱型は近世中期以降に墓石の主流となる。
- I, 角柱皿型・・・・・・・・
- J, 角柱錐型・・・・・・・・
- K, 笠塔婆型・・・・・・・・村落では特定の家（名主級）に限り造ることが出来たと思われる。
- L, 唐破風付笠塔婆型・同上
- M, 自然石碑・・・・・・・・
- N, 板状自然石碑・・・・・・・・王禅寺墓地 志村家に緑泥片岩製のモノがある

*石堂・・・・・・・・多摩川・鶴見川流域では見かけない 北関東・北陸・東北で見かける
因みに米沢市にある上杉家家臣はこの形態が主流 中に五輪塔を納める

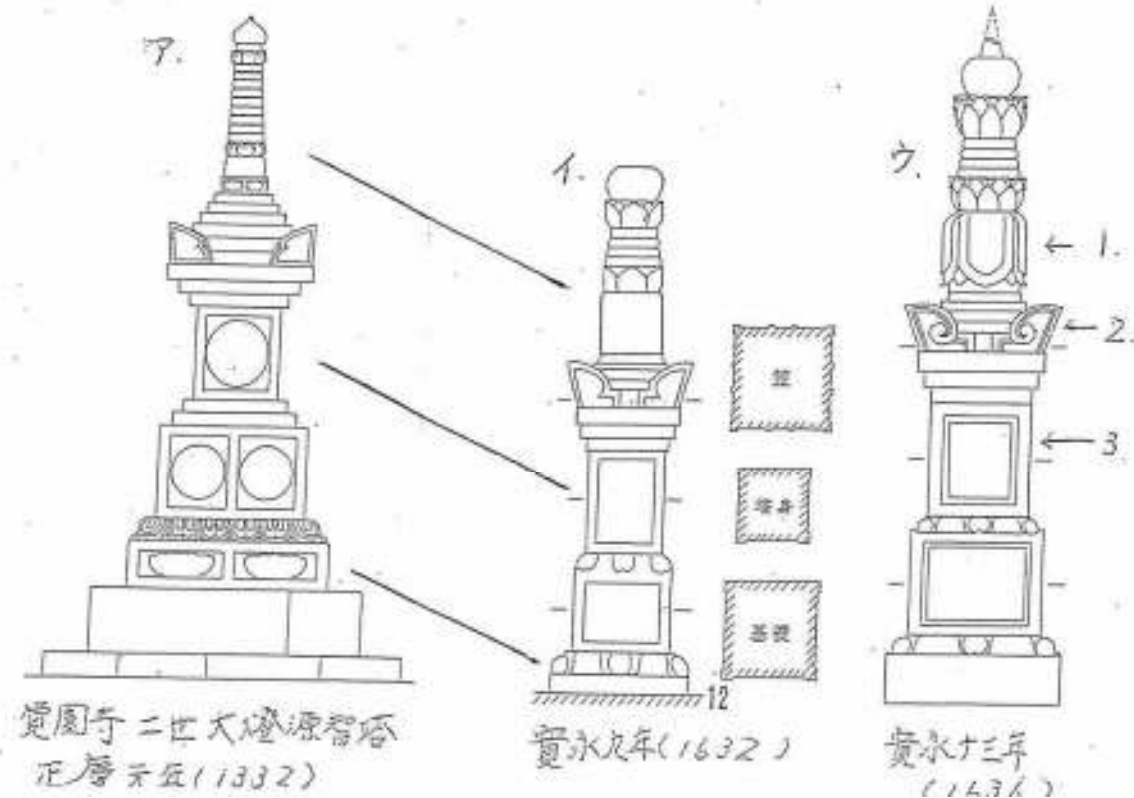
形態の図版 『日本石仏辞典』による



調査の進め方 カードに記入 写真を撮る 計測する 文献に当たる (5分)

五輪塔・宝篋印塔の形態は中世と近世とでは大きく違う (10分)

※本格的に取り上げて考えたいテーマである。現在、資料を集めているので簡潔に！



この銘文を信じてよいか

彫られた年月日と墓塔の造立年月日

例題1, 谷中墓地 (1611)
慶長十六年辛亥歳 八月二十九日
阿弥陀三尊種子 昌譽景月信士
板碑型 未芙蓮華レリーフ

江戸石工の優秀品

例題2, 潮音寺墓地 (1594)

俗名口男

笠原助左 (衛門)

文禄三年 行年百十五才

灵

歸真自覚宗心信士

位

□七月十九日

板碑型 未芙蓮華レリーフ

香炉 花瓶 作りつけ

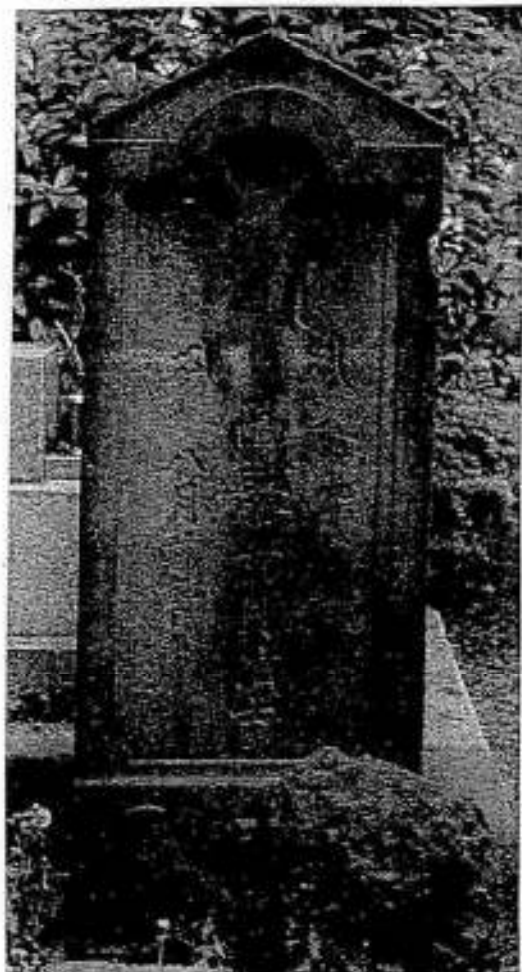
形態の実測・観察はに基づく基準作りは大切だ。

ア、大きさ (法量) イ、石材 ウ、銘文 年月日 干支 法名 願文

エ、形態 オ、様式 (それぞれの形態に付随する細部の様式=例えば 宝篋

印塔の隅飾突起様式変遷・板碑型基礎における蓮弁の編年など)

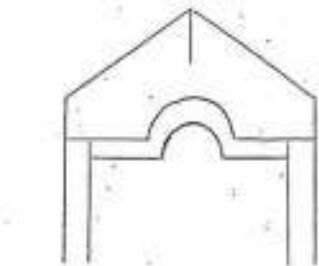
写真2枚 例題1, 例題2,



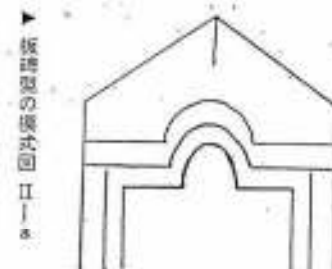
(10分)

板碑型基礎における蓮弁の編年

縣 敏夫「近世墓塔の発生にみる形態」日本の石仏115 2005/9/25



板碑型の模式図 1-a



▶ 板碑型の模式図 1-a

▶ 板碑型の模式図 2-a

▶ 板碑型の模式図 2-b

▶ 板碑型の模式図 2-c

表三 板碑型基礎における蓮弁の編年 (江戸初期の都内庚申塔)

①元和九年 (1624)		①元和九年 (1624)	
②元和九年 (1624)		②元和九年 (1624)	
③寛永二年 (1625)		③寛永二年 (1625)	
④寛永九年 (1632)		④寛永九年 (1632)	
⑤寛永十年 (1633)		⑤寛永十年 (1633)	
⑥寛永十一年 (1634)		⑥寛永十一年 (1634)	
⑦寛永十一年 (1634)		⑦寛永十一年 (1634)	
⑧寛永十一年 (1634)		⑧寛永十一年 (1634)	
⑨寛永十一年 (1634)		⑨寛永十一年 (1634)	
⑩寛永十一年 (1634)		⑩寛永十一年 (1634)	
⑪寛永十一年 (1634)		⑪寛永十一年 (1634)	
⑫寛永十一年 (1634)		⑫寛永十一年 (1634)	
⑬寛永十一年 (1634)		⑬寛永十一年 (1634)	
⑭寛永十一年 (1634)		⑭寛永十一年 (1634)	
⑮寛永十一年 (1634)		⑮寛永十一年 (1634)	
⑯寛永十一年 (1634)		⑯寛永十一年 (1634)	
⑰寛永十一年 (1634)		⑰寛永十一年 (1634)	
⑱寛永十一年 (1634)		⑱寛永十一年 (1634)	
⑲寛永十一年 (1634)		⑲寛永十一年 (1634)	
⑳寛永十一年 (1634)		⑳寛永十一年 (1634)	

表三 (注) ①埼玉県三郷市戸ヶ崎・常楽寺 ②東京都足立区花畑・正覚院 ③千葉県松戸市幸谷・幸谷観音 ④東京都文京区根津・根津神社 ⑤東京都品川区西五反田・徳蔵寺 ⑥埼玉県草加市福河町・慈尊院 ⑦東京都荒川区東尾久・尾久神社 ⑧東京都足立区西新井・浅間神社 ⑨東京都北区赤羽・宝徳院 ⑩埼玉県川口市戸塚・西光院 ⑪埼玉県草加市神明町・東福寺 ⑫埼玉県三郷市新和・御岳神社 ⑬埼玉県草加市手代・手代会館 ⑭東京都荒川区荒川・三峰神社 ⑮東京都足立区小台・七院中 ⑯東京都豊島区西果穂・大日堂 ⑰東京都台東区根岸・西蔵院 ⑱⑲以外、拙著「図説庚申塔」に於る。

斎藤考司「江戸時代の石塔」
1983年3月より転載

2. 村々で最初に墓を造ったのはだれか 近世初期墓塔の造立者について (15分)

地区	銘	年代	形態	家名	所在地
栗木	寛文十三年 (1673)	宝篋印塔	飯草	林清寺裏墓地	
片平	元和八年 (1623)	板碑型	旗本前場	修廣寺長瀬家墓地 三回忌造立	
	寛永六年 (1629)	一石五輪塔		修廣寺長瀬家墓地	
	慶安五年 (1652)	板碑型	神藤	トウロン場跡 承応元年	
王禅寺	寛永 (1624~1643)	五輪塔	住職	王禅寺墓地 増上寺領	
	明暦二年 (1656)	板碑型	志村	王禅寺墓地	
	正保三年 (1646)	一石五輪塔	吉垣	同上 空風輪欠損	
	正保二年 (1645)	板碑型	鈴木	鈴木家一家墓地	
真福寺	寛文六年 (1666)	板碑型		真福寺跡墓地 井上新左衛門	
上麻生	寛永元年 (1624)	板碑型	旗本三井	浄慶寺 開基檀家逆修	
	寛永十九年 (1642)	一石五輪塔	旧家小島	常安寺 開基檀家	
早野	正保三年 (1646)	一石五輪塔	旗本富永	戒翁寺 開基檀家	
岡上	正保二年 (1645)	板碑型	山田	東光院墓地 為00	
参考例					
三輪	寛永七年 (1630)	五輪塔	旧家萩野	高蔵寺 為00 沢山城	
寺家	寛永十年 (1633)	五輪塔	旧家大曾根	東円庵寺 北条家家臣干支不一致	
小机	元和九年 (1623)	宝篋印塔	旗本笠原	雲松院	
小机	寛永十一年 (1634)	宝篋印塔	旗本門奈	同上	
紺屋町	寛永七年 (1630)	宝篋印塔	旧家比留間	正教寺 銘文に注意	
小山	元和六年 (1620)	宝篋印塔	旗本荒川	保寿院 開基檀家	
谷中	元和三年 (1617)	宝篋印塔	幕臣大久保	瑞輪寺 石材に注意	
豊島区	寛永十八年 (1641)	宝篋印塔	幕臣朝倉	維司ヶ谷墓地	

参考 近世宝篋印塔の変化

中世と近世の宝篋印塔の様式変化については齋藤彦司氏の研究がある。最近この変化に着目した別の研究者から「中国の宝篋印塔の様式が近世初期に伝播したという」新しい見解が発表された。近世墓塔の研究が日本に留まらず、大陸を視野に入れた研究になった。このことに留意しつつも地道な事例研究が求められている。

3. 初期墓塔にはどのような特徴があるのか (写真・図版を使い特徴を説明) (20分)

4. 墓には身分制度がストレートに現れる

大きさ 灯籠などの施設の有無

5. 真福寺谷戸の近世墓石から村の成立をよむ

事例研究 (時間が無い場合には別の機会に、文献史料と付け合わせながら)

まとめに

急速な家族関係の変化 墓にも変化・・・記録する必要・・・文化財として保護されていない
 多摩川・鶴見川流域の石造物の悉皆調査の必要性
 文献史料に現れない庶民の生活資料を収集、記録する。地域の歴史像をより豊にする。
 アマチュアの参加が可能な領域

表2 基準となる近世初期墓塔 (番号は一覧表の番号)

年	代	形態	所在地	造立主旨	番号
1	元和8年 (1622)	板碑型	修廣寺 長瀬家墓地	旗本前場勝秀供養塔	2
2	寛永元年 (1624)	板碑型	浄慶寺 歴代住職墓他	旗本三井家逆修供養塔	3
3	寛永12年 (1635)	五輪塔	広福寺 横山家墓地	三十三回忌供養塔	9
4	寛永17年 (1640)	宝篋印塔	本通寺 小倉家墓地	七回忌供養塔	12
5	寛永19年 (1642)	五輪塔	寿福寺 板橋家墓地	逆修供養塔	20
6	寛永20年 (1643)	五輪塔	広福寺 木下家墓地	十三回忌供養塔	23
7	万治元年 (1658)	櫛型	浄慶寺 歴代住職墓他	旗本三井家供養塔	64
8	寛文3年 (1663)	光背型	光明院 歴代住職墓他	旗本河野通利三十三回忌供養塔	71
9	寛文4年 (1664)	板碑型	東光院 山田家墓地	逆修供養塔	72

表1 多摩・麻生区における近世初期墓塔の形態

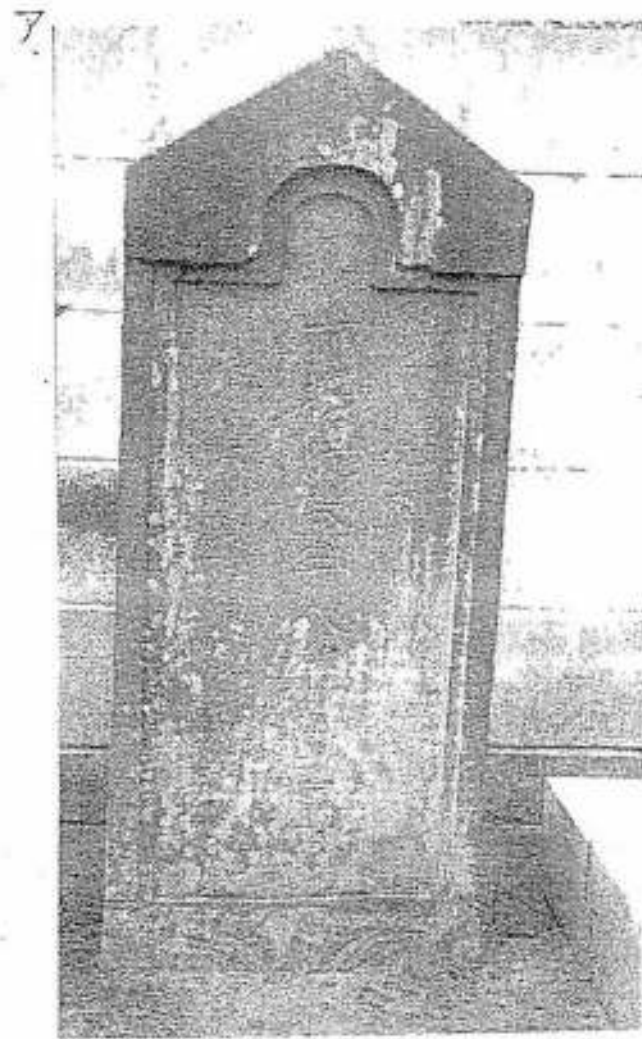
年代	宝篋印塔	五輪塔	一石五輪塔	板碑型	板碑型連碑	光背型	角柱錐型	笠塔婆型	無逢塔	櫛型	合計	逆修	回忌供養
1611~20 慶長16~元和6							1(1)				1(1)		
1621~30 元和7~寛永7	2	1	1	2(2)							6(2)	1(1)	2(1)
1631~40 寛永8~寛永17		2	1	3							6		2
1641~50 寛永18~慶安3	1	8	4(1)	12	2	1		1(1)	1(1)		30(3)	1	1
1651~60 慶安4~万治3	3	2		13(1)	1	4				1(1)	24(2)		
合計	6	13	6(1)	30(3)	3	5	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	67(8)	2(1)	5(1)

注 1 板碑型・板碑型連碑で二人の戒名を刻む場合は、年代の新しい方を用いた。
 2 () 内の数字は旗本の墓塔を表す。例4 (1) は全体が4基 この内1基が旗本の墓塔をあらわす。
 表からわかること
 1 初発期 (1611~30年) は旗本と北条氏旧臣の旧家の墓塔である。
 2 旗本が多様な形態の造塔文化が伝えたことがわかる。また、旗本が逆修供養塔・回忌供養塔をはじめた。
 3 逆修・回忌供養の墓塔は寛文期を境に減少する。
 4 中世の造塔文化の伝統をひく宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔の造立が盛んであるが、寛文期に入ると見かけなくなる。
 5 初期墓塔は形態や造立主旨において中世の伝統が残っている。

1~2巻と比べ 中西前場論文

寛文・延宝期は墓塔の画期 ~ 本格的な江戸時代がはじまる

元和 ~	寛文・延宝 ~
旗本(大名を含む)・北条氏旧臣	庶民
願文 為00 積証菩提	
逆修・回忌供養	
宝篋印塔・五輪塔	角柱型の増加、板碑型
多様な形態	画一化

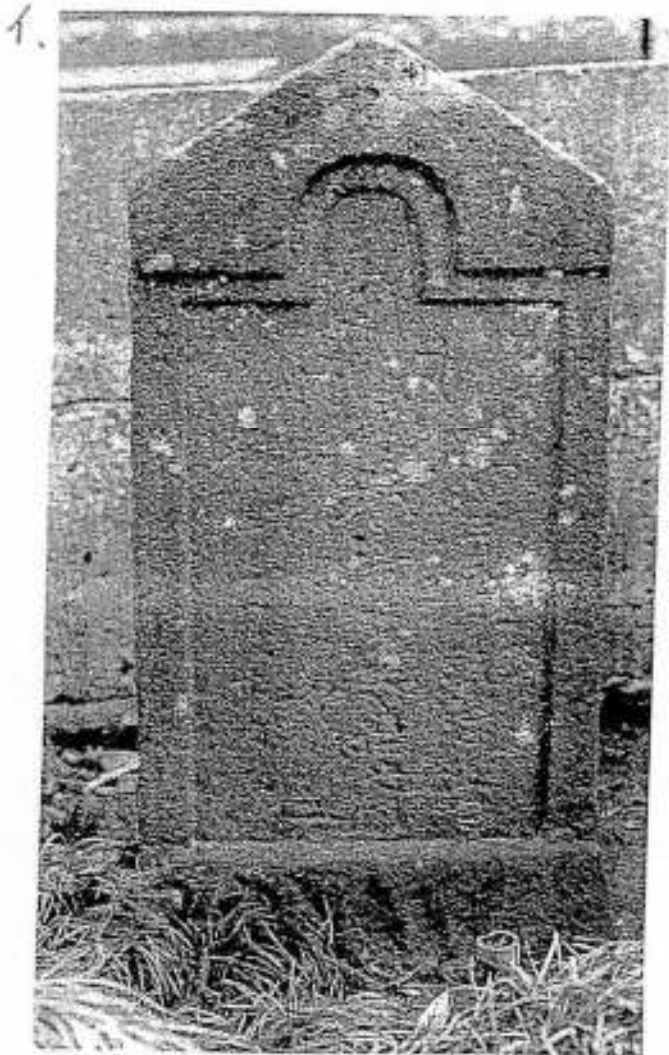


頭部、ワクに注目

蓮座に注目

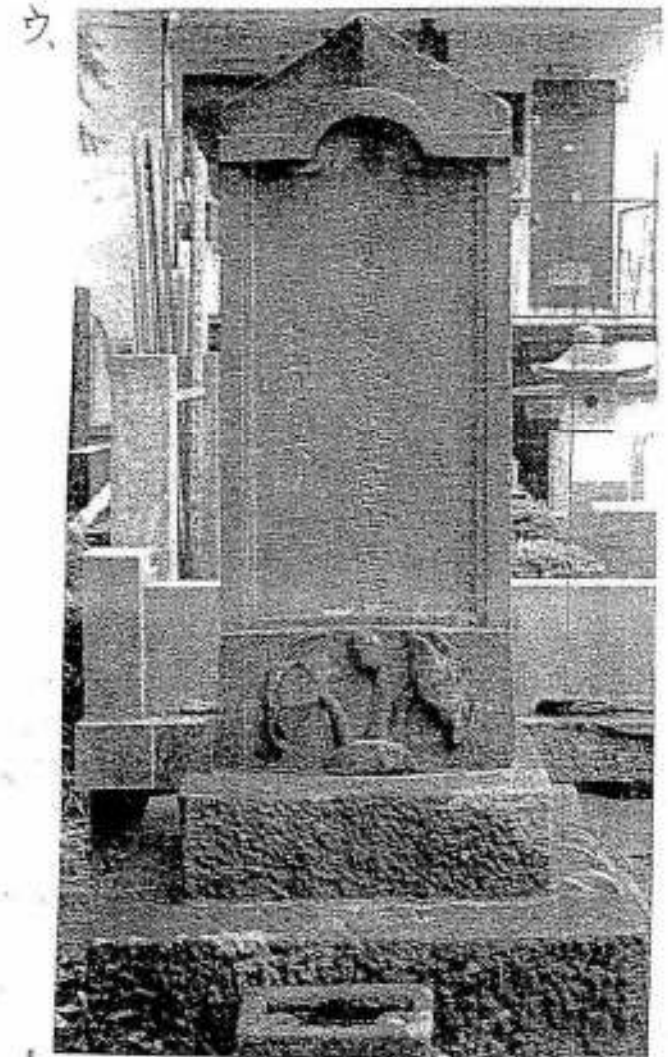
元和八^癸天
前場院殿半入宗圓居士
三月初三日
蓮座
(陰刻)

修廣寺長瀬家墓石

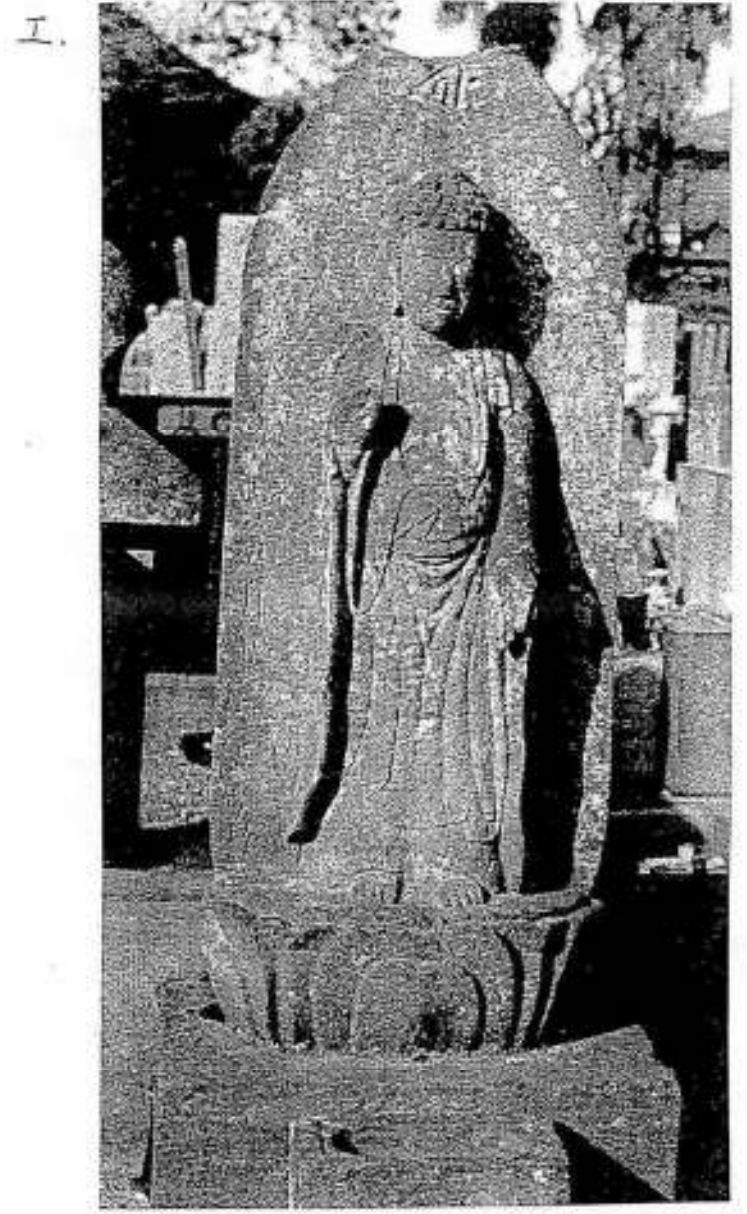


阿弥陀三尊
觀音
サ
キリク
サク
教主
修
十一月廿日位
蓮座
(陰刻)

淨度寺尼代住職墓石



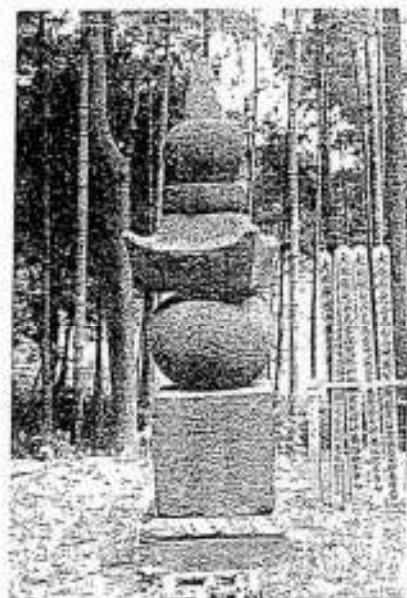
承應元^{壬辰}歲
潮音寺殿大菴宗鏡居士 靈位
十二月初六日
蓮座
(陽刻)



No.5
I.
キリク阿弥陀如來立像
寛永第八^未年九月二十三日白
背面
寛文三^{癸卯}年九月廿三日
三十三回忌に供養(陽刻)
蓮座

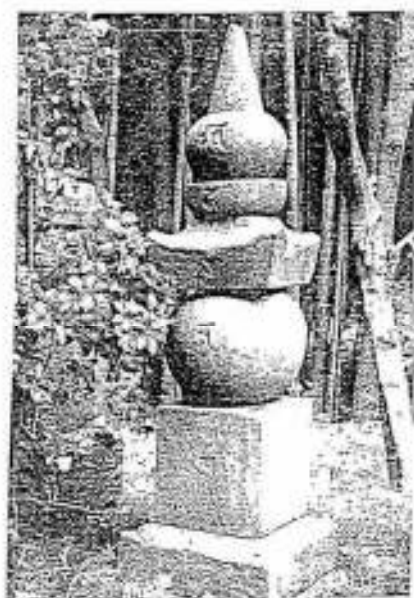
来迎印 原図
仏像がある
もといた

戒翁寺 殿球の墓



第四号塔

富永家五輪塔



第二号塔



第三号塔

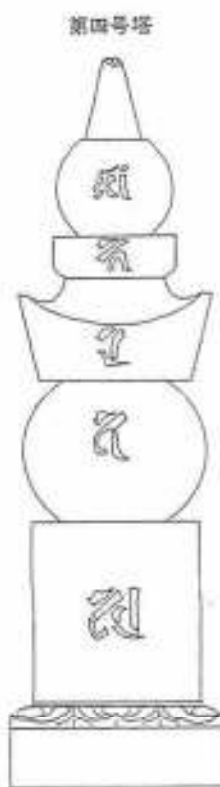
一石五輪塔



第一号塔

一石五輪塔

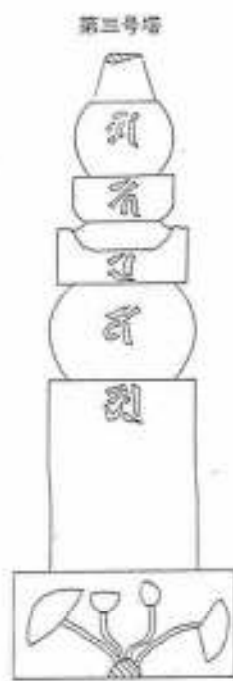
夫婦



第四号塔

豊松院殿無岸鐵心居士
寛文二十五年極月廿八日

重師塔



第三号塔

平野の五輪塔

初代重吉夫人の塔

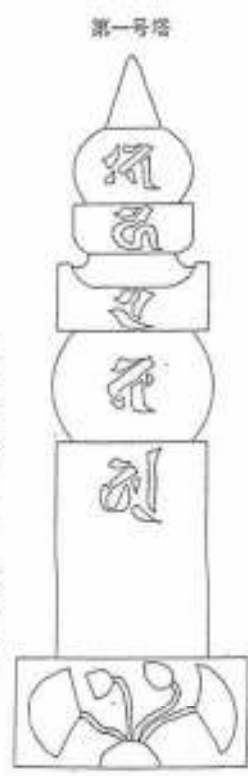


第二号塔

高雲院殿昌岳良繁居士
寛文二十五年霜月十九日

式部勝塔

(寛文朝)



第一号塔

富永主膳正源朝臣安
牙环院殿善翁宗政居士
正保三丙年十二月十六日

初代重吉塔

夕摩のありみ 17号
それとともに、それぞれの地域において墓標を受容した人々の階層や歴史的背景についても、検討が必要である。中西望介氏は、「川崎市内における近世初期墓標について」(『川崎市文化財調査報告』三三)において、神奈川県川崎市北部の万治三年(一六六〇)までの近世初期の墓標を調査し、この地域の初期墓標は旗本が知行地の寺院を通じてもたらし、それが村の「旧家」「百姓」といわれる戦国期以来の由緒ある家格の家に受容されたことを明らかにしており、注目される。

以上のように、江戸から周辺村落への近世墓標の普及をめぐる問題について考えてみたが、少なくともここでは、墓標が航路や街道などの交通路に沿って、都市から村へ普及していったこと、そこに各地域の地理的・経済的・歴史的条件が加わっていったことを想定することができそうである。

他に、寺院あるいは寺墓、寺檀制との関連も考慮する必要があるだろう。



たにがわ あきお
早稲田大学教授
川崎市在住

【引用・参考文献】
谷川章雄「江戸の火葬墓」『歴史と建築のあいだ』古今書院 二〇〇一年
谷川章雄「近世墓標の普及の様相」『ビューマン サイエンス』一四一—二〇〇一年
谷川章雄「江戸の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館 二〇〇四年

谷川章雄「江戸周辺村落の墓制」より転載
以上のように、近世都市江戸の墓制は、一七世紀後半と一八世紀前半という二つの画期を通じて、身分・階層の表徴としての墓の秩序が成立し、土葬が主体となっていくと思われ、土葬が主体となっていくとする江戸の墓のあり方は、周辺村落の墓に少なからず影響を与えたと考えられるのである。

前場

権太郎某がとき難ありて家たゆ。寛永緒に、越前朝倉の流なりといふ。

某

勝秀

吉右衛門 入道 鎌平入
織田右衛門をよび豊臣大関に仕へ、のち東照宮、台院殿につかへたてまつる。元和六年三月一日死す。法名経隆。

勝政

久三郎
東照宮につかへたてまつり、大坂御陣に供奉し、のち台院殿に仕へたてまつり、御小姓組をつとめ、二百六十石給を知行し、寛永三年御上洛のときしがひたてまつり、正保元年死す。

勝吉

清左衛門
別家となり、子孫吉右衛門某がとき家たゆ。事は下にみえたり。

勝門

久三郎
正保元年歳時を繼、十一月十三日はじめて大猷院殿に拜請し、二年六月二十五日御書院番に列し、明暦三年八月十八日歳米三十俵給を加増あり。寛文九年閏十月十八日年ごろ意なく勤めしにより、黄金二枚を賜ひ、元禄九年十二月二十二日また勤勲を賞せられて黄金五枚を拜賜す。後番を辭し、小普請となる。正徳二年二月三日死す。

某

積之助 孫十郎
明暦三年八月七日はじめて慶有院殿に

まみえたてまつる。明暦寛文七年十一月二十一日御小姓組に列し、正徳二年五月二十六日歳時を繼、四年三月二十日死す。年六十五。

某

權之助 孫右衛門
元禄六年十二月九日御書院の番士となり、歳米三百俵を賜ふ。十一年八月九日横間番に轉す。十二年父に先だちて死す。

某

權太郎
元禄十一年七月九日父が遺部を賜ひ、小普請となる。正徳四年五月二十六日祖父が歳時を繼、先の歳米はおさめらる。享保三年十二月二十九日さきに請て温泉に赴くの時、假養子の事を申進し發足すべきむね、障長大崎肥前守職也これをしめすのころ、養父の男あるのよし申せしかば、やがて親族をしるせる書にも書載しむ。しかるに其男は家臣前掛久右衛門某が子にして、そのれが子にあらざるを、偽をかまへて、おほやけを諍めし始末、その罪かろからず殿科にも處せらるべしといへども、酒をもつて家督とせしにもあらざれば、これを宥められ遺流に處せらる。

家紋 藤丸 藤巴

巻第六百七十

日下

寛政重修諸家譜卷第四百五十三

宇多源氏 佐々木庶流

富永

安藤守 某年死す。年九十六。法名道正。

某

源五郎
織殿助 北條早曾をよび氏頼につかふ。某年死す。年八十八。法名光順。

重政

二郎三郎 氏頼氏康につかへ、武藏國河越合戦のとき討死す。年二十八。

重次

孫左衛門 今の屋階、初孫久、のち泰久に作る。

重久

孫左衛門 今の屋階、初孫久、のち泰久に作る。兵隊につかへ、堀和伊守守某に屬して先手の士たり。下總國鴻巣、武藏國岩槻等の戦に軍功あり。また武田信玄兵を討つ時、和が守れる駿河國舞臺寺の城を攻るのとき、敵將者をして城中に火をかけしかば、城兵逃去もの多し。重久等縱十一人のこりとて、長矢倉に火をはなつて敵を防ぎ、力戦して敵軍所の剣をかうぶる。のち其刻意して死す。年四十六。法名正誓。

重吉

孫六郎 孫大夫 主膳 今の屋階、初孫之、のち泰吉に作る。母は北條氏康の臣 田中越中守奉行が女。

三井

某

十右衛門 今の屋階、彌市郎吉盛後正武に作る。
武田家の臣山縣三郎兵衛景景につかふ。天正十年六月東照宮、本多百助信俊をして甲府につかはされ、織田右衛門生害の事を川尻忠後守領吉につけらる。備吉うたがひのころを領き放きて信俊を殺し、甲府を去て京師におもむかんとす。郷士等これを感じて謀りて、彌吉を殺す。このとき十右衛門某案に抽てその首を得たり。このこと東照宮の御體に達し、御怒をかうぶる、めされて御座下に列し、御命によりて井伊兵部少輔重政に屬し、十二年四月九日長久手の役に力戦して討死す。年二十六。法名道末。妻は某氏の女。十右衛門某死してのち東照宮につかへたてまつる。

吉正

十右衛門 彌市郎 左衛門佐 從五位下 母は某氏の女。

幼にして父にをくれ、天正十五年より母とも大奥にめし居る。成長のち越前國東武藏國郡其兩郡のうちをいて千五百石をたまひ、東照宮の御傍に勤仕し、後從五位下左衛門佐に叙任し、慶長八年御徒の頭となる。寛永二年五月二十九日死す。年四十二。法名道徳。芝増上寺に葬る。のち代々葬地とす。
家傳に、東照宮廟東に入れたまふのはじめ、彼寺に彼御ありて住持の僧存座におほせて、今よりのち代々職を預けさせたまはむ事を約せらる。のとき、吉正御傍に候し御次に在しが、汝もまたこの寺をもつて代々の葬地となすべきのよし仰を蒙るといふ。
妻は大久保石見守長安が女。

兵衛氏秋氏直に雇仕し、堀和伊守守某に屬す。北條家武田勝頼と合戦のとき、勝頼朝比奈又太郎某を伊豆國湯川の城に籠しむ。のち其城をさりとてかへる。このとき職ひて高名す。そのち由良信綱守備と上野國新田にをいて相たつかふのとき、兵衛の使として其陣にいたりて職功あり。また佐野宗綱と合戦して備くるとき敵陣を遮る。重吉等計略をもつて軍を全うしてかへる。のち皆川山城守廣照と下野國大平山にをいて合戦し、また宇都宮國綱と戦ひ、あるひは佐竹義重と下野國沼尻、常陸國筑波等の合戦にも軍功をあらはす。其後武藏國旗名川にをいて瀧川一益と戦て高名あり。天正十八年小田原籠城のとき中村武郡少輔一氏が陣、水の手の際に損をゆふ。重吉一人山の陣戸大手より城外の谷庭に出、鎧槍を放ちて兵一人を打とり、また山の陣戸大手を出て夜討して兼生氏郷が營をやぶり、ついで其陣所にをしよせ相戦てしりぞく。幕城のち氏直に隨從して高野山にのほる。文禄元年伏見にめされ東照宮に拜請し、名護屋陣のとき供奉し、三年武藏國郡旗部の内にして采地二百五十石をたまひ、慶長五年上杉景勝御征伐のときしたがひたてまつり、下野國小山にいたり、また關原陣に供奉し、のち伏見城の番衛をつとむ。其のち大坂陣度の役にも應從す。元和八年八月御書院奉行となり、武藏國埼玉郡のうちにして五百五十石の加恩あり。後屋敷奉行をかねつとむ。寛永五年常陸國行方郡におもむき、論議を推せしより時原二領をたまふ。九年六月二十五日御館の奉行に轉じ、七月朔日同心十人をあづけらる。十年十二月二十八日甲斐國山梨郡のうちに